

社会科教育研究って何だろう？

9月17日（水曜日）、第7回（文系第4回）チャレンジ講座を行い、教育学部の渡邊大貴先生に「社会科教育研究って何だろう？」というテーマで講義をしていただきました。今回の講座では、社会科教育や社会科の授業について、「学習者」と「教員」のそれぞれの視点から見ていきました。

まず講座の初めに、「“よい”社会とはどのような社会であるか」という問いがあり、受講者はそれぞれの答えを考え、また先生からいくつかの例を示されました。そこから、社会科教育の目的とは、「市民的資質を育成すること」、「一人ひとりが主体となって、より良い社会をつくることができるよう育成すること」であることを学びました。

1-1. 社会科の究極的な目的とは？

社会認識を通して
市民的資質（citizenship）を育成する

▶「社会」を**学び**、一人ひとりが**主人公**となる
民主的な「社会」をつくる人を育てる教科

参考：内閣（1971）、日田（2022）など

（6）給食から出る残菜の量を調べ、その結果を朝の会で報告、共有する。

- ・給食当番がその日のクラスの残菜の種類と量を記録。
- ・栄養教諭から、学校全体から出された量についても聞き取る。
- ・その結果を、翌日の朝の会で報告し、一人一人が記録カードに記入する。

→子どもたちからは、次第に次のような声があがってきた。

【朝の会】

「ああ、うちのクラスは、学校全体の量に達してないぞ。よかったあ！」

「ええっ！うちのクラスは、学校全体の量を超えている！」

【給食中】

「まだ、おかずとオレンジが残っています。もっと食べられる人はいませんか。」

「残った牛乳は、捨てられてしまうんだね。そうすると水を汚すことになるね。」（“牛乳1本を流すと、魚の住める水に汚すためには、大量の水が必要になる”というこれまでの学びを踏まえての発言。）

（櫻井，2016：pp.50-51）

続いて、実際の小学校社会科の授業実践の分析を行いました。題材は小学4年生の「私と食べ物から出るごみ」というテーマの授業です。身近なものとして給食（と、そこから出るごみ）を取り上げ、児童たちは、給食の残菜を自分たちの目で確認し、各家庭でのごみを減らす工夫について話し、ごみを減らすための取り組みを他の学年・学級の生徒に発信していました。児童たち自身が、ごみの問題を「自分ごと」として捉え、話し合いを重ね、問題解決に向けて動く様子がとても印象的でした。「学習者」として、社会をよくするための方法を真剣に考え、自分たちなりの答えを見つけたのです。

この授業を「教員」の視点から捉えてみると、残菜を実際に見てその匂いをかぐなどの体験を児童にさせることで、より良い社会への実現へ向かわせたいという意図があることが分かりました。教員の、児童たち自らで答えや結論を見つけてほしいという願いと、その願いのとおりに自分たちで結論を導いた児童の達成感を見ることができました。



1-3. 市民的資質の多義性と議論の活発化の必要性

「（略）市民的資質の定義は必ずしも統一的なものではない。（略）市民的資質の定義はこれまでもこれからも**何者かが統一化することのない**ことが、社会科としては重要なことである。」

「民主的な国家や組織、地域においては、（略）市民的資質は常に**活発な議論**の中に置かれ続けることが求められる。」

（永田，2022：p.10）

講座の最後に先生は、「市民的資質を育成するためにはどんな社会の出来事を取り上げて授業をつくりたいか」と問いかけました。この問いについて自分なりに考えることで、受講者の考えも深まるのではないかと感じました。

今回の記事（講義概要）は、日田高校が担当しました。

今回の講座には、経済学部203教室で31名、オンラインで259名の高校生が参加しました。感想の一部を紹介します。

- なんとなく受けていた小学校の社会科が思っていたよりも大事だなと感じました。社会科の先生は柔軟性や豊かな発想力がいるなと思いました。
- 専門的な用語がいくつかありましたが、講義を受けるうちになんとなくつかむことができ、とても興味深かったです。
- 「陳情」の動画で、小学生たちが自ら行動して自分たちが暮らしやすい社会を創ろうとしている姿がすごく伝わってきて、感心するとともに、自分には何ができるだろうと考えるきっかけになりました。とても記憶に残る学びの多い講義でした。